新旧市街地に居住する高齢者を中心とした居住環境に対する意識評価に関する研究

下村泰彦*・増田昇*
安部大就*・山本聡*
山口博樹**

Study on the Evaluation of Residential Environment by Elderly People in the New Town and the Old Town

Yasuhiko SHIMOMURA・Noboru MASUDA
Daishu ABE・Satoshi YAMAMOTO
Hiroki YAMAGUCHI

摘要：本研究では、居住環境の相違や高齢者の属性の違いが身近な環境に対する充足度に及ぼす影響を明らかにし、今後の高齢化社会に対応した環境整備のあり方を探った。その結果より、居住環境の整ったニュータウン地区では、充足度は全般的に高いものの、道路環境への目目細かな配慮や歴史性の創出方策が重要な課題であり、特に、無職者には健康関連の施設整備、一世代型にはコミュニティ形成が急務であると考えられる。居住環境が未整備な旧市街地地区では、定住性の高い高齢者には居住環境の質的整備が重要であり、特に、無職者には生活関連施設等の屋外施設整備、多世代型には屋外施設整備や道路の安全性の確保も重要な課題であると考えられる。

はじめに

急速な高齢化社会への進行に伴い、高齢者の交通事故死傷者数の増加や地域社会からの孤立の問題、あるいは健康高齢者に対応したレクリエーション施設需要などが増加する中で、高齢化社会に対応した身近な環境整備がますます重要となってきている。このような状況のもと、1980年代に入り、高齢化社会に対応した環境整備に係わる研究が増加傾向にあるものの、それらは、老人福祉施設の利用構造や利用状況調査から福祉施設整備の課題について探った研究¹⁻⁶⁾が大部分を占めている。これに対し、高齢化の問題と居住環境との関連性を捉えた既往研究には、高齢者の世帯構成別の同居意識や社会参加状況から住宅・地区整備計画の課題について探った研究⁶⁾や、千里ニュータウンを事例に高齢者の歩行環境、永住意識と同居意識といった住環境意識、公共公益的施設の利用実態等を総合的に捉えた研究⁷⁾等がある。しかし、高齢

化社会に対応した身近な環境づくりのあり方を探る上で、居住環境の違いや高齢者の属性の違いが整備課題にどのように係わってくるかを探ることが重要であると考えられるが、このような研究はまだ少ない現状にある。

そこで本研究では、居住環境の異なるニュータウン地区と旧市街地地区とを対象に、居住者に対する意識調査を通じて、居住環境に対する居住者の充足度を後述する年齢層間での比較評価から捉えた。さらに、高齢者に論点を絞り、高齢者各人の職の有無および家族型といった属性の違いによる高齢者の充足度評価と居住環境条件との関連性を考察することにより、高齢化社会に対応した身近な環境整備に係わる課題と方向性を探求することを目的とした。

1. 研究方法

調査対象地区は、面積、人口、人口密度がほぼ同一で

表-1 意識調査における被験者構成

属 性 地 区	総 被 験 者 の 年 齢 別 構 成					65才以上の被験者数				
	20才	35才	50才	65才	計	職の有無別		家族型別		計
	34才	49才	64才	以上		有 職	無 職	一世代	多世代	
ニュータウン地区	32 (21.1)	38 (25.0)	39 (25.7)	43 (28.3)	152 (109)	17 (39.5)	26 (60.5)	32 (74.4)	11 (25.6)	43 (100)
旧市街地地区	20 (12.0)	40 (24.0)	54 (32.3)	53 (31.4)	167 (100)	22 (41.5)	31 (58.5)	21 (39.6)	32 (60.4)	53 (100)

*大阪府立大学農学部農業工学科 **堺市都市局公園部公園緑地課

あるのに対し、高齢化の進行状況、生活関連施設等の周辺環境条件および町の歴史の異なる2地区を抽出するものとし、大阪府堺市より、1969年に入居が開始された泉北ニュータウン地区（竹城台、若松台小学校区）と旧市街地地区（熊野、少林寺小学校区）とした。

居住環境に係わる調査では、まず、住民台帳から両地区の成人の年齢別人口構成を、20才～34才、35才～49才、50才～64才、65才以上の4つの年齢層に分けて捉えた。次いで、堺市発行の1:2,500の地形図、都市公園配置図等を用いた図上および資料調査により、両地区における自然系土地利用状況（樹林地・草地・農地といった緑被地、裸地、水面の面積占有率）、1㎩当たりの生活関連施設数および都市公園数、歩道設置率（歩道付き道路延長に緑道延長を加え道路幅員4m以上の全道路延長で除した割合）を計測または調査した。

意識調査では、アンケート調査を通じて身近な環境に対する意識評価を捉えるものとし、選挙人名簿抄本から各対象地区に居住する成人被験者500人ずつを各年齢層別に等分し無作為に抽出した。調査は、1993年10月に直接郵送法で実施し、ニュータウン地区152票と旧市街地地区167票の有効回答を得た。なお、表－1は、意識調査における被験者数を年齢層別および65才以上の高齢者の属性別に示している。調査内容は、身近な居住環境への充足度（コミュニティ、文化・教育、医療・健康、自然、交通に係わる15項目）であり、各項目について「非常に充足」～「非常に不足」の5段階で質問した。

解析では、居住環境に係わる評価項目に対する5段階尺度に－2～＋2の評価点を与え、前述した各年齢層別に平均評価点を算出した。この平均評価点を基礎データとして因子分析法（主因子法）を適用し、因子負荷量および因子得点を用いて考察を進めた。さらに、本論文では、生産年齢人口（14～64才）に対する老人人口（65才

以上）を高齢者とし、65才以上の被験者の職の有無別および家族型別にクロス集計を行って平均評価点および分散を算出し、属性別に平均値（平均評価点）と分散から算出した検定統計量をt分布表と照らし合わせることにより有意水準5％で平均値の差の検定を行った。

なお、本論文では、充足度評価結果の解釈に際して、居住環境に対する充足度が高い場合には、その居住環境への被験者の期待感が弱いのか、もしくは既に居住環境そのものが完備されているかの2側面が考えられること、一方、充足度が低い場合には、居住環境への期待感がかなり強いのか、もしくは完備されていないかの2側面が考えられることを念頭において考察した。

2. 調査対象地区の居住環境特性

表－2は、両地区の居住環境条件を示している。

年齢別人口構成をみると、全国の65才以上の人口割合が全体の13.0％（総務庁1991年10月現在の人口推計）と7.7人に1人であるのに対し、ニュータウン地区では、65才以上の人口が8.8％で11人に1人と高齢化は進んでおらず、旧市街地地区では、19.8％で5人に1人が高齢者となり、21世紀に予想されている高齢化社会の人口構造（2010年での65才以上の人口推計は全体の21.06％：厚生省人口問題研究所1991年6月実施）に近い値となっている。また、物的環境についてみると、周辺の自然系土地利用は、ニュータウン地区では、全体で28.0％を占め、旧市街地地区の7.7％に比較してかなり高く、特に緑被地が22.0％と高く、自然環境に恵まれていることが伺える。生活関連施設を1㎩当たりの施設数からみると、教育文化施設や医療または社会福祉施設は、両地区間で若干の数の開きはあるものの極端な差はない。神社・寺院については、旧市街地地区で1㎩当たり50.1カ所も存在するのにに対し、ニュータウン地区では1カ所も存在し

表－2 居住環境条件

項 目 地 区	面 積 (km ²)	人 口 (人)	人 口 密 度 (人/km ²)	年 齢 別 人 口 構 成 (上段：人，下段：％)					周 辺 の 自 然 系 土 地 利 用 状 況 (％)			
				20才 34才	35才 49才	50才 64才	65才 以上	計	緑被地	裸地	水面	計
ニュータウン地区	1.59	14,838	9,332	2,894 (29.8)	3,347 (34.5)	2,610 (26.8)	858 (8.8)	9,709 (100)	22.0	3.6	2.4	28.0
旧市街地区	1.32	12,298	9,317	2,555 (25.8)	2,686 (27.1)	2,713 (27.4)	1,964 (19.8)	9,918 (100)	2.8	4.6	0.3	7.7

項 目 地 区	周 辺 施 設 状 況 (1km ² 当たりの施設数)								周 辺 道 路 状 況 (km)			
	教 育 文 化 施 設	医 療 ま た は 社 会 福 祉 施 設	神 社 ・ 寺 院	都 市 公 園				道 路 の 総 延 長 C	歩 道 付 道 路 延 長 A	緑 道 B	歩 道 設 置 率 (A+B)/ C*100	
ニュータウン地区	1.9	1.3	0	1.9	0.6	0	0.6	4.4	26.51	9.40	3.68	49.3 (%)
旧市街地区	1.5	3.0	50.1	3.0	0	0.8	0	0	32.93	9.46	0	28.7 (%)

注 1：人口データは、1993年 8月現在

注 2：社会福祉施設には、保育園は含めていない。

ていない。都市公園については、特に緑道の設置状況がニュータウン地区の1㎢当たり4.4緑道に比べ、旧市街地地区では存在していない。周辺の道路状況を歩道設置率からみると、ニュータウン地区が49.3%とほぼ半数を占め、かなり高いのに対し、旧市街地地区では28.7%と低く、歩行環境に関してはニュータウン地区の方が旧市街地地区に比べ整備が行き届いているといえる。

3. 解析および考察結果

(1) 年齢間比較から捉えた高齢者の充足度特性

表－3は、因子分析結果から得た各因子に対する評価項目の因子負荷量を示し、図－1は、両地区の年齢層別に算出した因子得点を用いて、各因子ごとに布置させた結果を示している。なお、ここでは、各因子に対応する固有値が1.000以上となる第Ⅲ因子まで取り上げて考察を進めるものとした。

表－3より、第Ⅰ因子は「11.親しみのある近くの公園や広場」(0.952)をはじめとする8項目で、第Ⅱ因子は「15.年寄り等にとって障害物の少ない道路」(0.937)をはじめ5項目で、第Ⅲ因子は「1.助け合える暖かい近所づきあい」をはじめ2項目で、0.500以上の大きな値をとることから、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ因子は、それぞれ『生活関連施設全般』、『高齢者のための施設・制度』、『伝統的なコミュニティ』を示すものと判断した。

図－1より、『生活関連施設全般』に対する地区別の年齢層の布置状況をみると、充足度の全体傾向としては、年齢層に係わりなくニュータウン地区(0.335～1.707)と旧市街地地区(－1.080～－0.715)とに大きく2分されており、ニュータウン地区の方が旧市街地地区に比較して全般的にかなり高いことが読み取れる。地区別の年齢層に着目してみると、ニュータウン地区では、35才～49才代が1.707と最も高く、次いで50才～64才代(0.806)、20才～34才代(0.571)となっており、65才以上の高齢者の評価(0.335)は最も低くなっている。旧市街地地区では、評価に大きな差異はなく、すべて－1.080～

－0.865と低くなっている。『高齢者のための施設・制度』に対してしてみると、ニュータウン地区と旧市街地地区とは同様に、年齢層別に評価が4つに分類されている。65才以上が0.901～1.539と最も高く、50才～64才代(0.395～0.417)、35才～49才代(－0.526～－0.287)と続き、20才～34才代(－1.428～－1.066)が最も低くなっており、年齢が高くなるにつれて、充足度も高くなっている。また、年齢層別に充足度を地区間で比較すると、どの年齢層でもニュータウン地区の方が充足度は高くなっており、その差は特に65才以上の高齢者で0.638と最も大きくなっていることが読み取れる。第Ⅲ因子である『伝統的なコミュニティ』に対しては、ニュータウン地区の20才～34才代の評価が極端に低く、次いでニュータウン地区の65才以上の高齢者の評価(－0.561)が低くなっており、旧市街地地区の65才以上の高齢者の評価(－0.097)も同地区の35才～49才(－0.246)とともにマイナス傾向を示していることが読み取れる。

以上のことから、『生活関連施設全般』については、ニュータウン地区において、どの年齢層でも充足度は高いことから、生活関連施設は、全般的に整備が行き届いているといえるが、65才以上の高齢者の充足度は、他の年齢層に比較すると低いことから、高齢者は、高齢でも利用しやすいような生活関連施設の整備への期待感を有していることが伺える。一方、旧市街地地区においては、ニュータウン地区と生活関連施設の1㎢当たりの箇所数

表－3 居住環境に係わる各評価項目に対する因子負荷量

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子
1. 助け合える暖かい近所づきあい	-0.168	0.030	-0.964
2. 老人会、婦人会等の地域活動の活発さ	0.010	0.538	0.278
3. 祭り、盆踊り等の地域での催しの多さ	0.476	0.179	0.244
4. 美術館、郷土資料館等の文化施設	0.926	-0.148	0.011
5. 社寺や古い町並み等の地域の歴史的資源	-0.673	-0.020	0.683
6. 生涯教育や趣味等の生きがいを得る機会	0.411	0.797	-0.081
7. 健康管理について相談できる施設や制度	-0.179	0.878	0.131
8. スポーツや軽運動ができる公園や広場	0.909	0.338	-0.157
9. 健康づくりのために散歩等ができる道	0.908	0.317	-0.224
10. 草花や鳥等の自然とふれあえる場所	0.900	0.358	-0.197
11. 親しみのある近くの公園や広場	0.952	0.157	-0.179
12. 歩いて心地良い道	0.941	0.307	-0.080
13. 町中の移動や駅までの交通の便	0.726	-0.141	0.001
14. 年寄り等にとって安全な道路	0.433	0.884	0.086
15. 年寄り等にとって障害物の少ない道路	0.269	0.937	-0.127
固有値	8.361	3.724	1.727

：因子負荷量が0.500以上

図－1 年齢層別の充足度特性

がほぼ同等であるにも係らずどの年齢層も充足度はかなり低くなっていることから、年齢層に関係なく施設の質の向上への期待感を有していることが伺える。

『高齢者のための施設・制度』については、年齢層が高くなるにつれて充足度が高くなるといった傾向が見いだされる。これは、高齢者に対応した施設や制度の充実の必要性が低いように見えるが、高齢者の期待感の弱さによるものと考えられ、若年層の評価の低さを鑑みると、将来を見据えた新たな施設や制度の充実が不可欠であるといえる。また、各年齢層ごとに充足度を地区間で比較した結果、どの年齢層においても旧市街地地区の方が充足度は低くなっており、各年齢層とも旧市街地地区の方が高齢者のための施設や制度の整備への期待感は強いといえる。特に、65才以上の高齢者において、その傾向が顕著であり、前述したように両地区とも高齢者の期待感 は弱いながらも、旧市街地地区の高齢者の方がニュータウン地区に比較して整備への期待感はやや強いことが伺える。『伝統的なコミュニティ』については、高齢者は、両地区共通して充足度は低くなる傾向が見られ、特に町の歴史の浅いニュータウン地区において顕著であり、伝統的なコミュニティ形成に係わる施設といったハード面と、コミュニティ活動を推進し活性化させるといったソフト面での整備への期待感が強いことが伺える。

(2) 高齢者の属性の違いに基づく充足度特性

図-2は、65才以上の高齢者を対象とした充足度について、地区別の平均評価点を用いた評価プロフィールと地区間の充足度評価の差異を有意水準5%で検定した結果を示し、図-3は、職の有無別と家族型別の結果を示している。

・地区間比較

ニュータウン地区の評価は、旧市街地地区に比較して11項目で有意に高くなっており、特に、評価の差が大きい項目は、「4.文化施設」、「8.スポーツのための公園や広場」、「9.散歩等ができる道」、「10.自然とふれあえる場所」、「11.近くの公園や広場」、「12.心地良い道」である。両地区間の評価の差が小さい項目の中で、両地区共通して評価が高い項目は、「13.交通の便」で、やや高い項目は「3.地域での催しの多さ」、「6.生きがいを得る機会」であり、「14.安全な道路」、「15.障害物の少ない道路」は中庸を示している。一方、旧市街地地区の評価が、ニュータウン地区に比較して有意に高くなる項目は、「5.地域の歴史的資源」だけである。また、両地区間で有意な差が認められない項目の中で、両地区共通して評価が高い項目は、「1.近所づきあい」、「2.地域活動の活発さ」、「7.健

康相談の施設や制度」であることが読み取れる。

以上のことから、ニュータウン地区では、緑道を含めた歩道設置率の高さが散歩等に適した心地良い道路に対する充足度評価に反映されているものの、両地区共通して、高齢者にとっての安全で障害物のない道路に対する充足度が低いことから、段差処理や安全対策等の木目細かな道路整備に対する期待感が強いと考えられる。また、ニュータウン地区では、1㎢当たりの公園数が旧市街地地区とほぼ同数であるものの公園に対する充足度が高いことから質の高い公園整備が施されているといえ、さらに、居住地周辺の緑被地の多さが自然とふれあえる場所に対する充足度評価に反映しており、レクリエーション活動の場としての緑道、公園、自然環境は整っているといえる。その反面、ニュータウン地区では神社や寺院が存在しておらず、高齢者にとっての心の拠り所ともなる地域の歴史的資源に対する期待感が強いことが明らかとなった。一方、町の歴史の古い旧市街地地区においては、ニュータウン地区とは反対に、1㎢当たりの神社・寺院数が50.1カ所と極端に多くなっていることに起因し、これは本調査対象地区特有の箇所数の多さではあるが、地域の歴史的資源については充足しているといえる。その反面、高齢者にとって安全で障害物の少ない心地良い道、スポーツができ親しみのある身近な公園、自然とふれあえる場所等の屋外施設や、生涯教育等の生きがいを得る機会や文化施設等の生涯教育系の屋内施設といった居住環境全般に対する整備への期待感が強いことが明らかとなった。

・職の有無別比較

両地区共通して有職者の方が有意に評価が高くなる項目は、「8.スポーツのための公園や広場」、「9.散歩等

> : 有意水準 5% で有意差が認められた (評価: 大 > 評価: 小)
< : 〃 (評価: 小 < 評価: 大)
• : 有意差が認められない

図-2 高齢者の充足度評価結果 (地区別)

ができる道」、「10.自然とふれあえる場所」、「11.近くの公園や広場」、「14.安全な道路」である。地区別にみると、ニュータウン地区では、上記の5項目に加え、「7.健康相談の施設や制度」、「13.交通の便」であり、旧市街地地区では、「4.文化施設」、「6.生きがいを得る機会」、「12.心地良い道」、「14.安全な道路」である。一方、両地区共通して無職の方が有意に評価が高くなる項目はない。また、地区別にみると、ニュータウン地区では、有意に評価が高くなる項目はなく、旧市街地地区においては、「1.近所づきあい」、「2.地域活動の活発さ」、「5.地域の歴史的資源」であることが読み取れる。

以上のことから、無職者は、有職者に比較して、両地区共通して充足度が全般的に低くなる傾向にあることが明らかとなった。特に、旧市街地地区でこの傾向が顕著であり、旧市街地地区の無職者は、文化施設や生涯教育施設、スポーツができ親しみのある近くの公園や広場、自然とふれ合える場所、安全で心地良い道の整備といった居住環境整備への期待感が強いことが明らかとなった。無職者は有職者に比較して余暇時間を多く有し居住地で費やす時間も多くなることから、居住環境として劣った旧市街地地区では、以上のような傾向を示すものと考えられる。このような反面、旧市街地地区の無職者にとって、近所づきあいや地域活動といった地域のコミュニティはかなり確立されていることが確認され、心の拠り所となる歴史的資源も充足していることが明らかとなった。これは、旧市街地という町の歴史の古さ、高齢者の居住歴の長さや、前述した居住地内での生活時間の長い無職者であるということに起因するものと考えられる。一方、ニュータウン地区では、無職者と有職者とはほぼ同様な傾向を示し居住環境全般に渡り整備がなされているものの、

無職の方が、主として健康関連面に係わる施設整備や、町中の移動や駅までの交通の便や安全な道路整備への期待感が強いことが明らかとなった。

・家族型別比較

両地区共通して一世代家族型の高齢者の方が有意に評価が高くなる項目は、「8.スポーツのための公園や広場」、「14.安全な道路」、「15.障害物の少ない道路」である。地区別にみると、ニュータウン地区では、上記3項目以外になく、旧市街地地区では、上記3項目に加え、「5.地域の歴史的資源」、「9.散歩等ができる道」、「11.近くの公園や広場」である。両地区共通して多世代家族型の方が有意に評価が高くなる項目は、「1.近所づきあい」、「2.地域活動の活発さ」であり、地区別にみると、ニュータウン地区では、「3.地域での催しの多さ」、「4.文化施設」、「5.地域の歴史的資源」、「10.自然とふれあえる場所」、「11.近くの公園や広場」、「12.心地良い道」であり、旧市街地地区では、「7.健康相談の施設や制度」である。また、上記の項目のうち、「5.地域の歴史的資源」、「11.近くの公園や広場」は、ニュータウン地区では多世代家族型の方が評価は高いのに対し、旧市街地地区では両家族型の評価ともに低いものの、一世代家族型の方が評価はやや高く、評価が逆転していることが読み取れる。

以上のことから、両地区共通して、一世代型の高齢者の方が、近所づきあいや地域活動等に対する期待感が強く、特にニュータウン地区ではこの傾向が顕著である。これは、子供を有した多世代型に対応して建設されてきたニュータウンにおいて、子供の世帯分離が急速に進行していることによるものと考えられる。これに対し、スポーツ等のできる公園や広場、高齢者にとっての安全で障害物の少ない道路は、両地区共通して、多世代家族型

> : 有意水準 5%で有意差が認められた (評価: 大 > 評価: 小)
 < : " (評価: 小 < 評価: 大)
 . : 有意差が認められない

図-3 高齢者の充足度評価結果(職の有無別・家族型別)

の高齢者の充足度は低く、特に、旧市街地地区での評価が低いことから、旧市街地地区では、同居の孫の世話ができるスポーツ等の運動系の都市公園や親しみやすい都市公園等の屋外施設の整備への期待感が強く、また、外出の際の歩行環境にかなりの危険性を感じており、交通環境の早急な整備が重要であることが明らかとなった。また、両地区で評価の逆転が見られた地域の歴史的資産や親しみのある近くの公園や広場は、ニュータウン地区に比較し旧市街地地区における一世代家族型の高齢者にとって慣れ親しんだ存在となっていることが伺える。

4. まとめ

以上の解析結果から、ニュータウン地区では、居住者全体に対応した生活関連施設等は整っており、居住環境に対する充足度は全般的に高いものの、高齢者にとっても利用しやすいような生活関連施設への再整備や、高齢者にとって道路の安全性や歩行環境に関する段差処理や安全対策といった、より木目の細かな整備や、心の抛り所ともなる歴史性の創出方策がニュータウン運営上重要な課題となると考えられる。高齢者の属性の違いからさらに課題を捉えてみると、無職者と有職者とで大きな差異はないものの、無職者にとって健康関連面の施設整備への期待感が強く、高齢化の進行に伴った施設整備が今後重要な課題となろう。さらに、子供を有した多世代型に対応して建設されてきたニュータウン地区では、全般的に多世代型の充足度が高くなるが、特に、一世代型の高齢者は、近所づきあいや地域活動といった地域のコミュニティ形成に係わるソフト面への期待感が強く、子供の世帯分離が急速に進行している現状を鑑みると、これに対応したコミュニティ形成に係わる対策が急務であると考えられる。

一方、旧市街地地区では、全般的に居住環境が未整備であり、定住性の高い高齢者にとっては重要な問題であるといえ、生涯教育等の生きがいを得る機会や文化施設

といった生涯教育系の施設整備や、心地良さを生み出す街路樹整備やレクリエーション活動の場としても利用しやすく質の高い公園整備など居住環境全体の質に強く影響する自然環境の整備が必要となると考えられる。また、属性の違いからは、高齢化が既に進行した旧市街地地区にとって今後ますます無職者の増加が予想されるが、無職者は有職者に比較して、居住地内で費やす時間が多くなることから、これらの余暇活動に対する対策が急務であると考えられる。また、多世代型にとっては、同居の孫の世話ができる屋外施設の整備とともに、道路の安全性の確保も重要な課題である。

参考文献

- 1) 高橋 徹他 (1984): 歩行健常老人の日常徒歩外出行為と施設利用性状・歩行空間評価: 建築学会梗概集E分冊, 1229-1230
- 2) 清水美佐子 (1986): 高齢者施設に関する研究 (その1) - 高齢者の施設利用の構造分析: 建築学会梗概集E分冊, 323-324
- 3) 山極邦之他 (1987): 地域高齢者利用施設の利用構造分析 - 都内23区とS区の基本的属性比較: 建築学会梗概集E分冊, 505-506
- 4) 中鉢令児 (1987): 高齢化社会における生活圏 - 高齢者の歩行活動の実態調査: 建築学会梗概集F分冊, 67-68
- 5) 樋口 秀, 中出文平 (1991): 健常老人の日常行動と福祉施設整備に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, 26, 673-678
- 6) 本田昭四 (1987): 高齢社会に対応した住宅・地区整備計画の課題と方法, 日本都市計画学会学術研究論文集, 22, 541-546
- 7) 紙野桂人, 竹嶋祥夫 (1991): 千里ニュータウンの高齢化傾向とその再整備方策: 高齢化社会政策の実験, 52-101: 新評論

Summary : Japan has rapidly shifted toward an aging society in recent years. But in relation to this, environmental and service facilities have been criticized as lagging. In this study, the views of elderly people in the main were compiled with regard to residential environment in the new town and the old town. By clarifying the degree of adequacy, the environmental adjustments and facilities needs to respond to the aging society were brought to high. Major findings of this study are follows. In the new town, though the degree of environmental adequacy is high, elderly people desire safety roads and resources of local history. Elderly people without a regular occupation require elderly health facilities and elderly people who live in the family type of single-generation demand area activities. In the old town, for elderly people who tend to be restricted to their immediate neighborhood, it is most important to increase the quality of environment.